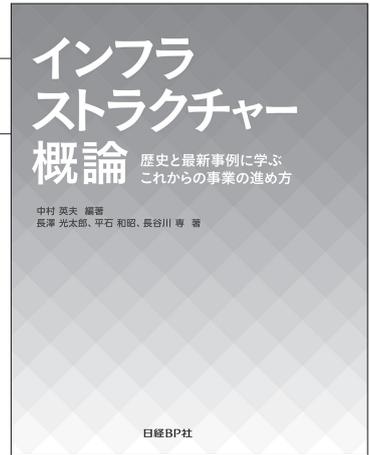


中村英夫＝編著 長澤光太郎・平石和昭・長谷川専＝著

インフラストラクチャー概論 —歴史と最新事例に学ぶこれからの事業の進め方—



2017年7月発行
本体3,200円＋税
日経BP社
ISBN 978-4-8222-0063-3

山内弘隆
YAMAUCHI, Hiroataka

運輸総合研究所所長
一橋大学大学院商学研究科教授

本書は、インフラストラクチャーにかかわるすべてのものにとって必読の書である。少子高齢化、人口減少という社会構造の変化に直面したわが国において、経済社会の基礎たるインフラストラクチャーの在り方を再考し、将来に向けた最適な戦略を構築することが喫緊の課題である。本書は、この課題に対峙するものを原点に立ち返らせ、未来に向けた様々な示唆を与えてくれる。時代背景を的確に反映した啓蒙書である。

本書の特徴を挙げれば、第1に、内容が包括的でありかつ極めて緻密に構成されていることである。本書は、そもそもインフラとは何かから始まり、その構想、事業化、建設、運営、管理、海外展開と論が進む。類書には見られない範囲がカバーされている。実務的にはどれも避けて通れないステージだが、研究者は一般に自らの研究範囲にこだわりがちで、教科書的な著作でも内容の濃淡は避けがたい。これに対し本書は、すべての段階が適切かつ十分に扱われており、その水準は高い。痒い所に手が届くと同時に、高度な内容になっている。

本書がこのような網羅的かつ高水準なものとなった背景には、長い時間と労力をつぎ込んだ編著者等の熱意と信念があると思われる。編著者中村英夫先生は、あらためて紹介するまでもなくこの分野におけるわが国の第一人者であり、先生のインフラストラクチャーに対する思い入れ、愛情が感じられる。3名の執筆者は詳細かつ綿密な準備を行い、その思いに十分応えている。中村先生指導の下でのチームワークの賜物である。

本書の第2の特徴は、記述のわかりやすさにある。豊富な事例とその分析、解説が散りばめられており、読者は興味惹かれる事例を参考にしながら物事の本質を会得することができる。事例も古代から最新のものまで広がりがあり、それが逆に読者の好奇心をそそることになる。

事例を用いながら論を進めるという手法は、読者自身の考察を要求するという点で演習的効果を持つ。受け止める側がその意図に気づくことがなければ、単なる読み物の集積に終わる。もちろん、そのような形で本書を読破することも無駄ではないが、やさしさの中でも読者に学習が求められている点に注意すべきであろう。

個人的に興味を持ったのは、第2章「インフラストラクチャー事業の構想」である。インフラの提供には社会的欲求を正しくとらえてそれを具体化し、適切な手段の選択、必要な資源の投入を行う必要がある。社会的欲求の認識は様々な主体によってなされ、それがインフラ構築の構想となる。本書では、構想の主体が見事に分類され、それぞれの役割が論じられる。そこには、公共の利益と私的な動機の葛藤があり、将来を見通し対処しなくてはならないという義務感がある。さまざまな主体が繰り広げるインフラに対する思い、夢がいかに具現されて行くか、大げさに表現すればそれは1つのドラマであり、次代を構想することの重要性が伝わってくる。

本書に1つだけお願いしたいことがある。取り上げられている内容、事例等をさらに踏み込んで勉強するためのインストラクションの追加である。どのような方法で調べるか、情報ソースはどこにあるか、議論のポイントは何かを示されれば、初学者だけでなく中堅実務家、研究者でさえも大きな恩恵を受けることになる。章末に参考文献が示されているが、もう少しの「ホスピタリティ」を期待したいところである。

このような「お願い事項」が残るとしても、もちろんそれは非本質的なものであり、本書の価値を揺るがすものではない。冒頭で述べた通り、本書はすべての関係者の必読書であり、この本を契機にさらに深遠なインフラストラクチャー論議と適切な施策の進展が望まれる。本書がその起爆剤となることを期待する。